

二〇一〇年度卒業論文題目

遠藤哲「宝塚1号墳における盾形埴輪の特徴・役割についての一考察」

中野綾子「宝塚古墳における円筒埴輪の製作技法と配置―埴輪工人集団の考察から―」
林 振華「唐長安大明宮含元殿考」

稲垣あゆみ「源頼朝による戦死者供養―源義朝の供養を中心に―」

大飼はな江「古代東海道の復元」

大島由衣「ガラス勾玉の製作技法に関する一考察」

大西美紅「近世尾鷲地域における難船処理の経済的影響―尾鷲組九木浦を事例に―」

岡村沙紀「明治・大正期における伊勢朝熊岳の開発と保存―保勝会とケーブルカ―敷設問題を中心に―」

下林未奈「中世後期北野社における河原者」

杉本智子「大津京の選地に関する一考察」

生川千恵「鎌倉時代における治療関係者―僧医を中心に―」

長谷川沙智子「狂言の排卑俗化について」

服部由貴「近世東海道石薬師宿・庄野宿の機能と特質」

松本葵「治承・寿永の乱における南都焼討の認識と被害状況」

味噌井拓志「古墳時代初頭の伊勢湾系土器波及にみる伊勢地域の役割について―ヒサゴ壺の分析を通して―」

山崎し央倫「船岡式製塩土器の機能における一考察」

編集後記

本年度は十六本の卒業論文が提出された。近年の傾向と変わらず、今年も出身地に関する題材を出発点に資料を集め、当該地を知る者ならではの視点で分析を加え、新たな解釈を導き出す秀作が目立った。ただ惜しむらくはそれらが、地域に深く食い込んで詳細な分析をしながら、普遍化する力が弱い点に課題を残した。もう少し風呂敷を広げる若者らしい大胆な発想の論考があってもよかった。

今、チュニジアに始まる「ネット革命」で、数十年間抑圧され続けた市民達が、丸腰の若者達を核に戦車の前に立ちはたかり、「暴君」を次々と追放した。天命に

よる「革命」が地響きをあげて連鎖反応を起こしている。

陳腐なのは、「革命」の本場・中国で、九〇年に及ぶ独裁に天命が下るのを恐れたのか、為政者達が、必死で情報統制を加え、「革命の波及を食い止めんとしている姿である。間もなく二年目の「天安門事件」がやってくる。二〇一一年六月四日、北京から目が離せなくなった。

ところが日本では、革命などどこ吹く風と、国民を放り出した醜い党派闘争が繰り返されている。小心者の代表者は何も決められず権力にしがみつき、前の代表者は自らの発言を「方便」だと言い放ち、汚い金まみれのカリスマは、自らの犯した罪を棚上げて居直り、元権力者集団は敵失に乗じて権力奪還に奔走している。この間隙を縫って放言軍団はできもしない約束を大声でぶち上げる。実現の可能性など無いと判っていても、目先の利益に飛びつくしか術のない国民は、ウジウジと方針も出せない奴よりましかと、絶望しながら「大声」に期待をかける。北アフリカとは逆に「暴君」の方がましかと、多数が思い始めている。

そして今の日本の若者の一番の関心が、「ドイツ・ブランドでの冷たい雨の日の傘がないことだ」としたら、これほど悲しいことはない。

最後の編集担当を終え、ホツとしたところでの愚痴である。(山中)

三重大史学 第一号

二〇一一年三月二日発行

編集・発行 三重大学人文学部考古学・日本史学・東洋史学研究室

〒五一四一八五〇七

三重県津市栗真町屋町一五七七

TEL:〇五九一―三三二―二二二一(代表)

FAX:〇五九一―三三二―九九一九九(共同)

MAIL(山田雄司): yyamada@human.mie-u.ac.jp

印刷

伊藤印刷株式会社(津市大門三二二三)